

緊急事態宣言が解除された直後の10月2日(土)、東京武道館にて三段以下審査会が行われました。台風一過汗ばむ陽気のなか、新型コロナウイルス感染対策を講じて、無事に終えることができました。あらためて部会事務局と係員の皆様に感謝申し上げます。

審査に先立ち、伊藤会長から審査員に対し「受審者の潜在能力をみてほしい」とのご訓示を頂いて審査に臨みました。

審査員として気づいた点を申し上げます。審査の可否に関係なく、全ての受審者と指導にあたられている先生方にも目を通して頂けると幸いに存じます。

作法(礼法)は、間違っている方、いい加減にやられている方が多く見られました。「武道は礼に始まり礼に終わる」と言われるように、礼法は敬う心を形に表したものです。普段の稽古の姿勢がそのまま表れますので、都度、正しく丁寧に行うようにしてください。

次に、ほとんどの方が正しい刀の握り方が出来ていませんでした。『全日本剣道連盟居合(解説)』(以下、教本)の34ページ「(八) 柄の握り方」を常に確認しながら、三段までに正しい刀の握り方を習得してください。正しい握り方が、段が上がるにつれてより求められる「掌中の作用」を可能にします。

指定技について気づいた点申し上げます。

1 本目「前」

全ての基本となる技です。教本36ページの着眼点①～⑦を常に確認しながら稽古してください。

初太刀の抜き付けが居合の生命ですが、右手で引っ張って抜いている方が多く、そのため切っ先が走らず、また斜めに切り上げている方が多く見られました。その要因は、教本の着眼点①「十分に鞘引きが出来ているか」が出来ていないためです。

振りかぶった刀の切っ先は水平から下げることなく、真っ向から刃筋正しく切り下ろしてください。切り下ろした刀の切っ先は水平よりわずかに下げます。

ほとんどの方が、この抜き付け・切り下ろしの際に、踏み込む足が前に出過ぎているために、腰が前に流れる、または、両膝が鈍角になっていました。両膝が直角になるように稽古してください。

そして、血振りと同時に立ち上がり「居合腰」になります。この「居合腰」がほとんどできていないため、その後の動作が安定せず、ぎこちなくなっていました。

納刀については、切っ先を鯉口に入れるのに柄頭を上下左右いずれかに大きく動かしている方が散見されました。各流派の定めに従い、教本にある通り正しく行なってください。

5 本目「袈裟切り」

鞘を左下にかえしながら刀を抜き出すのを、ほとんどの方が、鞘を左下にかえして刀を抜き出していました。これでは刀は抜けません。そのため、右手で引っ張り上げて抜かざるを得ず、切っ先が敵の右脇腹に届いていませんでした。

6 本目「諸手突き」

右斜め面からあごまでの抜き打ちの角度が、真っ向、もくしは、右ほほからあごの広角になっていました。また、前後の敵を切るために左足を左に踏みかえる際に右足踵回りになり、後足が極端な撞木足になっている方が多くみられました。十分注意して稽古してください。

8 本目「顔面当て」

教本の着眼点②③④が出来ていませんでした。また、前後の敵が同一線上にいる足捌きになっていました。後ろの敵は身一つ左にずれた位置にいる想定を理解して、稽古してください。

10 本目「四方切り」

右斜め前の敵に柄打ちする際、左腰が開いて後ろ足が撞木足になっていました。これでは教本の着眼点①にある「強く確実に打つ」ことができません。続いて、左斜め後ろの敵の水月を突き刺した時、同じく教本の着眼点③左右のしぼり込みができていませんでした。

今回の指定技には、「構え」として、八相の構え、諸手左上段の構えが出てきますが、ほとんどの方ができていませんでした。まずは正しい「構え」の形を覚えてください。

師や高段者の技を見ると、刀を勢いよく速く鋭く振りたくなる気持ちは十分理解しますが、それを可能にするのは、正しい体の備えや運用、正しい足捌きが伴ってこそ、です。それなしに速く強く刀を抜こう振ろうとすると、上体が揺れてしまい腕力に頼る手先だけの技になってしまいます。刀は腰腹を中心に全身を使って扱います。まずは、速さよりも正しい体の使い方、体や足の備え、体捌き、足捌き等々、正しい形を覚えるようにしてください。

今回合格された方は潜在能力を開花できるようさらに上を目指し、不合格の方は再挑戦を目指し、一層稽古に励まれる事を心から願っております。

以上